



Title	現代新聞における同格連体名詞の変化傾向：「という」に後続する使用に限定して
Author(s)	石井, 正彦
Citation	現代日本語研究. 2025, 16, p. 54-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102440
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代新聞における同格連体名詞の変化傾向

—「という」に後続する使用に限定して—

Diachronic Trends in the Use of Appositive Nouns in Modern Newspapers:

A Survey of Constructions Involving the Complementizer *to iu*

石井 正彦

ISHII Masahiko

キーワード：新聞文章，叙述構成語，同格連体名詞，変化傾向，「思い」

要 旨

計量的な基本語彙史研究の一環として，新聞の叙述系基本語彙の中核を占めると予想される「同格連体名詞」に注目し，1950年以降の記事標本データを収めた『毎日新聞経年コーパス』を用いて，「修飾節＋という」に後続する通算頻度10以上の121語を対象に，その使用量の変化傾向を調査した。新聞の使用語彙全体に対する同格連体名詞全体の使用率は1970年を頂点に増加から減少に劇的に転じており，これには新聞の「紙面改革」が影響していると推測されるが，同格連体名詞内部の変化にのみ注目すれば，ほぼ一貫して主観性・陳述度のより大きな同格連体名詞の使用が相対的に増えているという傾向が見出された。この変化傾向の具体相を感情名詞「思い」の増加を例に探り，「修飾節が感情を内容とすることが増える」「修飾節の内容を感情としてとらえることが増える」という2つの作用により生じたその変化が，新聞文章の叙述展開の核となる意味分節の形成を変化させている可能性について論じた。

1. はじめに

計量語彙論では，基本語彙を「様々の言語表現によく現れる（見出し）語を組として考えたもの」（水谷1964:7）と規定するが，こうした「様々の（＝使用範囲が広く，散布度が小さい）」とか「よく現れる（＝使用率が大きい）」とか

の量的な条件を（語彙調査の規模を極大化するなどして）突き詰めていくと、結局のところ、この規定に該当するのは、文章の「話題」に関係するような語ではなく、「いろいろな分野（の文章）で共通に使われる、文章表現の土台を形成する語」（樺島 2004:63）ではないかという予測が立つ。石井(2022)はこれを「叙述系の基本語彙」と呼び、それらが文章の叙述方法の変容によって新たな語を仲間入りさせながら変化している可能性を指摘した。本稿は、こうした前提に立って、新聞の叙述系基本語彙の中核を担い得る「同格連体名詞」という語類に注目し、それらの使用量の 20 世紀半ば以降の変化傾向を調べることで、どのような同格連体名詞の使用が増加／減少しているのかを見出すことにより、現代の新聞文章の叙述構成に生じている変化の一端を探ろうとするものである。

2. 叙述構成語としての同格連体名詞

同格連体名詞とは、奥津(1974)の用語で、(1)の「事実」のように、連体修飾節構造の被修飾名詞のうち、修飾節の外から付加されて、修飾節全体の表す事柄と同一の内容を表す（＝修飾節と同格である）ものをいう（修飾節と被修飾名詞との間に「という」が挿入できるという性質ももつ）。

(1) 公金が闘争資金に流用された（という）事実が暴露された。

（奥津 1974:317）

よく知られているように、これは、寺村(1977)の（「外の関係」のうちの）「内容補充」の関係における被修飾名詞と重なるものである。

叙述構成語とは、本稿における用語で、一まとまりの文章というものを「何らかの話題について何事かを述べる＝叙述する」ものであるとし、その表現もまた話題に関する部分と叙述の部分とから成り、したがってそれらを組み立てる語にも、話題に関する表現を組み立てるものと叙述の表現を組み立てるものがある、と想定したときの後者の語、すなわち「文章における叙述の表現を組み立てる語」をいう。

(1)の例は、「公金が闘争資金に流用された」という修飾節の内容を（場合により「という」を介しつつ）「事実」という被修飾名詞＝同格連体名詞で表しているのだが、これは、連体修飾節構造という文法的な名詞修飾表現の一種であ

ると同時に、書き手が修飾節の表す事柄を「事実」ととらえていることを表す叙述の表現でもある。この、先行する事柄を一つの名詞でとらえなおす（＝再表現する、概念化する）働きは、(2)のように、前文で述べられている事柄を、指示語「この」を伴って指し示すとともに、それを「事実」ととらえなおす叙述の表現と軌を一にするものである。

- (2) 厚生労働省の発表によると、日本で2023年に生まれた赤ん坊は75万8000人ほどで、過去最少だった。この事実は象徴的であり、社会福祉の行方、家族のあり方など、日本の将来について考えさせられる。

（『毎日新聞』2024年3月10日朝刊 二面）

高崎(2021)は、(2)の「この事実」のような形式を「指示語とその後に続く語句、という組み合わせから成る」「指示語句」と呼び、「テキストの中で、テキストのある意味のかたまり（＝意味分節）を〔指示＋代用・置換〕するという働きをもつもの」（同前:47）と規定した上で、それと(1)のような同格連体名詞の表現との共通性を次のように指摘している。

- (3) 同格連体名詞の方は例文には「トイウ」がカッコ内に補われて、文相当の内容とそれと同格の名詞をつないでいる。同格連体名詞が「～トイウ」の被連体修飾語としてその後に位置しているのである。この文レベルの「～トイウ」と同格連体名詞の関係性にあたるものが、テキストレベルでは、分節を受ける名詞の前に置かれる指示語とその名詞との関係性に相当するのではないだろうか。（改行）そして、奥津(1974)でも「トイウ」はカッコ内におかれているように、テキスト構成の働きをする名詞も、単独で、指示語を伴わなくてもその機能を果たすことができる場合のある点でも相通ずるものがあるように思われる。（高崎 2021:77）

同格連体名詞と指示語句中の名詞とは、文レベルとテキストレベルという違いはあっても、「文章中で、前の部分をまとめて後ろにつなぐことでテキスト構成をはかる」（高崎 2021:1）働きをもつという点で共通しており、「事実」のように名詞としても共通するものが多い（同前:76-77）。高崎は、「テキスト語彙論」という立場から、テキストレベルで働く後者のみを「テキスト構成語」（同

前:IX, 3) と呼んでいるが、本稿では、同格連体名詞もまた同様の機能をもつ（文レベルも含むより広い概念としての）「叙述構成語」であるにとらえたい。

その上で、本稿では、現代の新聞における同格連体名詞（のうち、「修飾節＋という」に後続するもの：後述）の使用の量的な変化の傾向に注目する。（この種の）同格連体名詞に限定するのは、その形式が明確で、大量かつ正確なデータ作成が見込めるからであるが、上述したように、同格連体名詞として働く名詞類は、文章中で指示語句をはじめとするさまざまな形式の叙述構成語としても働いていると考えられるため、その増減の傾向——どのような同格連体名詞の使用が増え、あるいは、減っているのか——を追うことは、新聞の叙述構成の中核を担う語類の変化を探ることにつながると期待できるからである。それはすなわち、現代新聞の「前の部分（＝先行する事柄）をまとめて（＝一つの名詞でとらえなおして）後ろにつなぐ」という叙述構成にどのような変化が生じているかを問う試みでもある。

3. 使用するコーパス

資料とする現代新聞の通時コーパスには、金愛蘭氏が元版を作成し、筆者もその後の増補・改訂に共同研究者として協力した『毎日新聞経年コーパス（第4版）』を用いる。このコーパスは、1950年から2010年までの『毎日新聞』（全国版）から、ほぼ10年おきに、毎月3日分（ページ数が極端に少ない1950年のみ毎月9日分）、各年36日分の朝刊各紙面の記事文章（見出しと本文）を、1950～80年は『縮刷版』からテキスト入力し、1991～2010年については『CDー毎日新聞データ集』から（毎日新聞社の許諾を得て）抽出して作成したプレーンコーパスである（詳しくは、金(2022)を参照）。コーパスのデータ量は、国立国語研究所の形態素解析ツール『Web茶まめ』(<https://chamame.ninjal.ac.jp/>)の「短単位」によって集計すると表1のようになる。

表1：『毎日新聞経年コーパス（第4版）』の語彙量（短単位）

	1950年	1960年	1970年	1980年	1991年	2000年	2010年	計
延べ	896,768	812,901	1,141,752	1,184,980	1,203,893	1,321,623	1,158,828	7,720,745
異なり	32,801	33,141	37,422	37,812	35,527	39,412	36,183	76,206

4. 対象とする同格連体名詞の範囲

本稿では、コーパスに現れたすべての同格連体名詞を数え上げるのではなく、(1')のように修飾節と同格連体名詞との間に「という」が現に介在しているものを対象を限定し、(1'')のように「という」が介在していないものは対象としない。

(1') 公金が闘争資金に流用されたという事実が暴露された。

(1'') 公金が闘争資金に流用された事実が暴露された。

その理由は、積極的には、「という」の介在が、他の連体修飾節構造（同一名詞連体修飾や相対名詞連体修飾）の被修飾名詞ではなく、同格連体名詞であることを証する徴表となる（奥津 1974:320-322）からというものであり、消極的には、「という」の介在しない被修飾名詞を同格連体名詞か否か大量の用例について判別するのに相当の時間を要するからというものである。

なお、奥津（同前:321）もことわっているように、「彼が買ったという山水画」のような同一名詞連体修飾（＝内の関係）でも「という」を挿入できるが、この場合は「伝聞」の意味合いが出てくるため、同格連体名詞との判別は可能である。「もの、とき、ところ、人」といった形式的な名詞も「という」に後続することが多いが、これらも、奥津（同前:354）が指摘するように、基本的には同一名詞連体修飾の被修飾名詞であり、同格連体名詞ではない。

このほか、対象とする同格連体名詞およびその連体修飾節構造の範囲については、以下のような方針を設けて限定した。いずれも、作業に投じる時間の制約による便宜的な基準である。

ア. 修飾節と同格連体名詞との間に介在する形式は「という」に限定し、「といった」「との」「とする」等の場合は採らない。

イ. 「という」に直接後続している同格連体名詞のみを採り、下例のように「という」と同格連体名詞との間に他の語句があるものは採らない。

（例）新安保条約にしても、国民の半分以上が知らないという明白な事実があるのに「安保改定は国民の要望だ」という。

ウ. 同格連体名詞が「という」に直接後続していても、その直後に他の要

素が後続して合成語を作っている場合は採らない。

(例) 国際情勢が変化し、社会主義諸国と資本主義諸国との相対関係に根本的な変化が生じたという事実認識は、いまや次第に深く西側諸国の中に広がりつつある。

エ. 同じく、もっぱら接辞的な要素が後続して臨時的な合成語を作っている場合も採らない(「～という条件つきで」「～という性格上」「～という方法以外に」「～という言葉通り」「～という考え自体」といった臨時的な合成語から「条件」「性格」「方法」「言葉」「考え」を同格連体名詞として採ることはしない)。

オ. 「という」の直前が、コピュラを伴わない名詞、形容動詞語幹、副詞などの場合は(節の述語か否かの判別に時間を要するので)採らない。

(例) 学区が下町の商店街という事情もあって家庭の管理が行きとどかず、だらしない服装の子もいる。

(例) 自衛隊の治安出動も考えたが、自衛隊の本質を考えた時、(出動は)無理という結論に達した。

以上のような方針のもとにコーパスから用例を収集し、1950年から2010年までの7調査年の通算頻度が10以上であった同格連体名詞を、以下にあげるものを除いて、分析の対象とすることにした。

(a) こと (b) くらい, わけ, 具合, 形(かたち), 程度

(c) 気, 線, 風(ふう) (d) 内容, 時代, 段階, 場合

(a) の「こと」は、奥津が「同格連体名詞の代表的なもの」(奥津 1974:316)とするものだが、実質的意味をもっていない形式名詞であるため、叙述構成語として働くことができない。(b) および(c) は(修飾語をとらずに)単独の名詞として自立しにくいものであるが、これらも「この～(は)」のような指示語句を構成しにくく、したがって叙述構成語として働くことが難しい。なお、「こと」「くらい」は、村木(2007)の「擬似連体節に後続する形式」の例にもあげられている。(d) は、上述した「もの、とき、ところ、人」の類に準ずるものとして、同格連体名詞ではないと考えたものである。

こうした作業を経て、最終的に対象とした同格連体名詞は、以下の121語である（五十音順）。

有様, 案, 意見, 意向, 意識, 意図, 意味, イメージ, 意欲, 印象, 動き, うわさ, 運動, 思い, 思惑, 回答, 考え, 考え方, 感じ, 観測, 観点, 危機感, 記事, 期待, 規定, 希望, 気持ち, 疑問, 議論, 空気, 計画, 傾向, 計算, ケース, 決意, 結果, 結論, 懸念, 見解, 現実, 現状, 原則, 構想, 声, 試み, 答え, 言葉, 作戦, 自覚, 仕組み, 事件, 事実, 事情, 自信, 姿勢, 事態, 実感, 質問, 指摘, 趣旨, 主張, 状況, 条件, 状態, 情報, 信念, 心配, 政策, 声明, 説, 説明, 前提, 側面, 態度, 立場, 提案, 点, 問い, 努力, ニュース, 認識, 願い, 狙い, 配慮, 発言, 発想, 話, 反省, 判断, 非難, 批判, 評価, 表現, 不安, 風潮, 不満, 雰囲気, 返事, 方向, 報告, 方針, 報道, 方法, 保証, 見方, 見通し, 矛盾, メッセージ, 面, 目的, 目標, 問題, 約束, やり方, 夢, 要求, 要望, 理屈, 利点, 理由, 例

以上の限定によって、同格連体名詞の中でもより基本的なもの、また、増減傾向の読み取りやすいものを対象とすることができる。とはいえ、「という」に直接後続する同格連体名詞は全体の一部に過ぎず、さらに、「という」の介在・不介在は完全に任意であるわけではなく、また両者の解釈が常に等価であるわけでもない。たとえば基本的で有意なものに絞り込んだとは言っても、本稿の分析が同格連体名詞の一部にしか及ばないことには注意する必要がある（実際に、この問題は7節での分析にも影響を与えてしまう）。「という」を介在させない同格連体名詞も含む包括的な調査は今後の課題としなければならないが、本稿が上のような限界をもつものである点は強調しておきたい。

5. 同格連体名詞の分類

どのような同格連体名詞の使用が増加／減少しているのかという問いに答えるためには、同格連体名詞をあらかじめ分類しておく必要がある。「どのような同格連体名詞か」を特定する観点には、その同格連体名詞が、（A）どのような修飾節をとるか／とらないか、（B）修飾節とどのような関係を取り結ぶか、（C）どのような語彙的意味を表すか、といったことが考えられる。も

もちろん、これらを総合した分類が望ましいわけだが、121語しかない同格連体名詞がいくつもの変数から成る細かい分類に耐えることは難しく、また、本稿の目的が「同格連体名詞であると同時に（他の形式の）叙述構成語としても働き得る名詞類の変化を探ること」であるなら、その分類は（C）の語彙的意味の観点から行うものとせざるを得ない。とはいえ、上の（A）～（C）は密接に関連しているから、（C）の分類が（A）や（B）をもある程度反映したものになることは多少とも期待できるところである。

同格連体名詞の意味的な分類には、奥津(1974)、寺村(1977)、高橋(1979)、大島(1991)などがある。本稿では、これらを参考に以下のような6分類の枠組みを設け、対象とする121語を配当する（各類五十音順）。

①コトの名詞（19語）

意味、規定、ケース、結果、現実、原則、仕組み、事件、事実、条件、前提、点、方法、矛盾、問題、理屈、利点、理由、例

奥津の「客観的同格連体名詞ーコトの類」、寺村の「コトを表わす名詞」、高橋の（「特殊化のかかわり」における）「できごとを表す名詞」、大島の「事実名詞」「ことがら名詞」に類する（＝その一部と重なる）ものである。奥津は、修飾節が表現する内容を客観的な事柄、状態としてとらえて名詞化するものを「客観的同格連体名詞」とし、そのうち「事柄ととらえて名詞化するもの」を「コトの類」、「状態ととらえて名詞化するもの」を「サマの類」としているが（奥津1974:337）、コトの名詞は前者に対応するものである。

②サマの名詞（17語）

有様、イメージ、印象、空気、傾向、現状、事情、事態、状況、状態、側面、態度、立場、風潮、雰囲気、方向、面

奥津の「客観的同格連体名詞ーサマの類」、高橋の（「特殊化・具体化のかかわり」における）「ようすを表す名詞」、大島の「さま名詞」に類するものである。

③思考の名詞（32語）

案、意見、考え、考え方、観測、観点、疑問、計画、計算、結論、見解、構想、作戦、姿勢、指摘、趣旨、政策、提案、認識、配慮、発想、反省、

判断, 批判, 評価, 方針, 保証, 見方, 見通し, 目的, 目標, 要求

奥津の「主観的同格連体名詞－理性的」, 寺村の「思考(・思念)の名詞」, 高橋の(「内容づけのかかわり」における)「心理活動を表す名詞」, 大島の「思考名詞」に類するものである。奥津は, 修飾節の表す内容を人間の主観的意識の内容(心理状態)として名詞化するものを「主観的同格連体名詞」とし, 表す心理状態によって「一般的」「情緒的」「理性的」に三分している(同前:337-348)が, 思考の名詞は「理性的」に対応するものである。

④感情の名詞 (25語)

意向, 意識, 意図, 意欲, 思い, 思惑, 感じ, 危機感, 期待, 希望, 気持ち, 決意, 懸念, 自覚, 自信, 実感, 信念, 心配, 願い, 狙い, 不安, 不満, 約束, 夢, 要望

奥津の「主観的同格連体名詞－情緒的」, 寺村の「思考(・思念)の名詞」, 高橋の(「内容づけのかかわり」における)「心理活動を表す名詞」, 大島の「志向名詞」「心理名詞」「感情名詞」に類するものである。寺村, 高橋は, 「思考の名詞」と「感情の名詞」とを分けていない。

⑤発話の名詞 (22語)

うわさ, 回答, 記事, 声, 答え, 言葉, 質問, 主張, 情報, 声明, 説, 説明, 問い, ニュース, 発言, 話, 非難, 表現, 返事, 報告, 報道, メッセージ

寺村の「発話の名詞」, 高橋の(「内容づけのかかわり」における)「言語活動を表す名詞」「表現作品を表す名詞」, 大島の「表出・はたらきかけ名詞」「伝達名詞」に類するものである。奥津は, 発話の名詞に対応する類を立てていない。

⑥行為の名詞 (6語)

動き, 運動, 議論, 試み, 努力, やり方

奥津の「行為の同格連体名詞」, 寺村の「コトを表わす名詞」のうちの「作業・仕事・役割など」, 高橋の(「特殊化のかかわり」における)「うごきを表す名詞」, 大島の「動き・行為名詞」に類するものである。奥津は, 修飾節が表現する行為の内容を受けて名詞化するものを「行為の同格連体名詞」としている(同前:348-350)。

本稿では、対象とする同格連体名詞121語をこれら6類のいずれか一つに分類する。奥津も指摘するように、たとえば「気配」という名詞は「客観的な事柄、状態を示す名詞か、それを主観が感じた意識内容として表わす名詞か、決めがたいところがある」（同前:337）、「性格」も「人間の主観的なものか客観的な状態を示すものか、どちらともとれる」（同前:340）、「研究」も「たしかに人間の主観的行為ではあるが、同時に客観的な事柄或いは行為でもある」（同前:348）など、分類の難しい名詞も少なくないのだが、ここでは、上述の先行研究による各類の説明や挙例などを参考にして、一つの名詞を最も適切と判断される一つの類に所属させるようにした。

6. 変化傾向のデータ

以上の方針・基準にもとづき、『毎日新聞経年コーパス（第4版）』を用いて、対象とする同格連体名詞121語の調査各年の使用率とその平均変化率および平均リジットを求め、各語の意味的な分類とともに、変化傾向のデータとして次ページ以降の表2にまとめた。

各語の各年使用率には、いわゆる「100万語当たりの調整頻度（PMW）」（＝各年の総延べ語数をすべて100万語とした場合の各語の出現頻度）を用い、表2の「50年」～「10年」の列に示した。

平均変化率とは、変化率（（変化後の値－変化前の値）／変化前の値）の幾何平均で、今回のコーパスで「全期間」の平均変化率を求めるなら、1950年から2010年までの隣り合う調査年6対の使用率からその変化率を求め、それらの積の6乗根を求めればよい。平均変化率の値が1より大きければ増加、小さければ減少ということになる。表2では、「1970年まで」「1970年以降」「全期間」という3期間の平均変化率を求め、それぞれの列に示した。1970年で区分する理由については後述する。

なお、平均変化率は計算式の分母となる「変化前の値」が0をとると計算できないため、使用率0の調査年がある語については適用できない。それを回避するために、ここではすべての語の各年使用頻度に“1”を足して使用率を再計算している。

平均リジットとは、順序性のあるカテゴリーにおけるある群の、折半数（渡

表2：同格連体名詞121語の変化傾向と意味分類（五十音順）

No.	同格連体 名詞	通算 頻度	100万語当たりの調整頻度（PMW）								平均変化率			平均リ ジット	意味 分類
			50年	60年	70年	80年	91年	00年	10年	～70年	70年～	全期間			
1	有様	12	6.7	3.7	0.9	0.8		0.8		0.475	0.838	0.693	0.247	サマ	
2	案	31	5.6	4.9	4.4	4.2	1.7	6.8	0.9	0.888	0.757	0.799	0.532	思考	
3	意見	172	15.6	45.5	34.2	24.5	19.1	10.6	13.8	1.450	0.805	0.979	0.509	思考	
4	意向	16	6.7	3.7	2.6	0.8	2.5			0.671	0.705	0.693	0.323	感情	
5	意識	49	2.2	1.2	4.4	6.8	4.2	13.6	8.6	1.256	1.160	1.191	0.735	感情	
6	意図	16	3.3	3.7	2.6		3.3	2.3		0.888	0.705	0.761	0.480	感情	
7	意味	160	22.3	14.8	27.2	27.0	14.1	25.7	12.1	1.096	0.825	0.907	0.572	コト	
8	イメージ	15				4.2	0.8	5.3	1.7	0.888	1.312	1.152	0.778	サマ	
9	意欲	19	1.1	3.7	3.5	2.5	3.3	1.5	1.7	1.404	0.877	1.026	0.570	感情	
10	印象	54	8.9	9.8	8.8	8.4	6.6	4.5	3.5	0.982	0.818	0.870	0.509	サマ	
11	動き	29	3.3	4.9	5.3	3.4	5.0	4.5		1.175	0.613	0.761	0.539	行為	
12	うわさ	29	3.3	3.7	7.9	5.1	3.3	2.3	0.9	1.404	0.667	0.854	0.509	発話	
13	運動	11	2.2	4.9	1.8	2.5				0.888	0.757	0.799	0.335	行為	
14	思い	76	1.1	2.5	0.9	7.6	4.2	13.6	34.5	0.888	2.121	1.587	0.840	感情	
15	思惑	17	1.1	1.2	0.9		5.0	3.0	3.5	0.888	1.253	1.117	0.731	感情	
16	回答	11	3.3	1.2			3.3	0.8	1.7	0.444	1.312	0.914	0.561	発話	
17	考え	128	21.2	22.1	21.9	22.8	10.8	16.6	3.5	1.012	0.660	0.761	0.503	思考	
18	考え方	106	17.8	23.4	28.9	14.3	5.8	7.6	3.5	1.256	0.617	0.782	0.444	思考	
19	感じ	83	6.7	9.8	15.8	18.6	6.6	9.8	6.9	1.463	0.827	1.000	0.575	感情	
20	観測	23	6.7		6.1	2.5	1.7	3.0	0.9	0.949	0.705	0.778	0.479	思考	
21	観点	18		2.5	3.5	2.5	5.8	0.8	0.9	1.985	0.793	1.076	0.608	思考	
22	危機感	18		1.2	1.8	3.4		6.1	2.6	1.538	1.071	1.208	0.734	感情	
23	記事	13	2.2		3.5	2.5		2.3	0.9	1.146	0.793	0.896	0.550	発話	
24	期待	10			3.5	0.8	1.7	1.5	0.9	1.985	0.793	1.076	0.643	感情	
25	規定	15		6.2	1.8	2.5		3.0	0.9	1.538	0.901	1.076	0.544	コト	
26	希望	19	4.5	2.5	4.4	1.7	0.8	3.0	0.9	0.973	0.757	0.823	0.482	感情	
27	気持ち	169	11.2	23.4	24.5	23.6	17.4	25.7	25.0	1.442	1.005	1.134	0.628	感情	
28	疑問	45	2.2	11.1	12.3	3.4	5.8	3.0	4.3	1.985	0.793	1.076	0.530	思考	
29	議論	42	1.1	4.9	6.1	6.8	7.5	6.8	3.5	1.776	0.886	1.117	0.641	行為	
30	空気	15	3.3	2.5	4.4	1.7	0.8		1.7	1.087	0.838	0.914	0.441	サマ	
31	計画	22	6.7	3.7	6.1	0.8	1.7	2.3		0.949	0.593	0.693	0.394	思考	
32	傾向	17	3.3	4.9	1.8	4.2	0.8	1.5		0.769	0.757	0.761	0.436	サマ	
33	計算	12		2.5	1.8	3.4	1.7	0.8	0.9	1.538	0.901	1.076	0.583	思考	
34	ケース	14		1.2	1.8	2.5		4.5	1.7	1.538	0.997	1.152	0.709	コト	
35	決意	14	5.6		2.6	1.7	0.8	2.3		0.725	0.705	0.711	0.437	感情	
36	結果	29	4.5	3.7	7.0	4.2	1.7	5.3		1.191	0.575	0.733	0.510	コト	
37	結論	35	7.8	8.6	3.5	6.8	1.7	4.5	0.9	0.702	0.793	0.761	0.461	思考	
38	懸念	20	2.2	7.4	2.6	3.4	2.5	1.5		1.025	0.705	0.799	0.455	感情	
39	見解	28	10.0	7.4	5.3	0.8		3.8	0.9	0.743	0.729	0.733	0.369	思考	
40	現実	21		2.5	5.3	3.4	0.8	3.8	2.6	2.349	0.867	1.208	0.632	コト	

No.	同格連体 名詞	通算 頻度	100万語当たりの調整頻度 (PMW)							平均変化率			平均リ ジット	意味 分類
			50年	60年	70年	80年	91年	00年	10年	～70年	70年～	全期間		
41	現状	10		2.5	1.8	2.5	0.8		1.7	1.538	0.997	1.152	0.576	サマ
42	原則	28	6.7	4.9	6.1	1.7	4.2	2.3	0.9	0.949	0.705	0.778	0.453	コト
43	構想	24		8.6	6.1	4.2	2.5	0.8	0.9	2.511	0.705	1.076	0.482	思考
44	声	182	8.9	33.2	31.5	32.9	20.8	17.4	20.7	1.800	0.904	1.137	0.585	発話
45	試み	14	1.1	1.2	0.9	3.4	4.2	0.8	0.9	0.888	0.997	0.959	0.617	行為
46	答え	20		4.9	5.3	2.5	3.3	0.8	1.7	2.349	0.806	1.152	0.548	発話
47	言葉	96	4.5	14.8	15.8	16.0	15.0	12.9	6.9	1.731	0.827	1.058	0.599	発話
48	作戦	15		2.5	3.5	2.5	3.3	1.5		1.985	0.667	0.959	0.574	思考
49	自覚	11	1.1		0.9	3.4	2.5	0.8	0.9	0.888	0.997	0.959	0.630	感情
50	仕組み	22	2.2	4.9	3.5	3.4	5.0	0.8	0.9	1.146	0.793	0.896	0.518	コト
51	事件	29	2.2	12.3	6.1	7.6		0.8		1.450	0.593	0.799	0.400	コト
52	事実	90	32.3	29.5	13.1	11.8	0.8	3.0	2.6	0.648	0.705	0.685	0.324	コト
53	事情	53	4.5	7.4	10.5	11.0	6.6	6.8	0.9	1.432	0.624	0.823	0.549	サマ
54	自信	23	3.3	6.2	4.4	2.5	1.7	2.3	1.7	1.087	0.838	0.914	0.487	感情
55	姿勢	54		2.5	9.6	12.7	5.0	10.6	5.2	3.076	0.871	1.326	0.672	思考
56	事態	24	3.3	6.2	3.5	5.1	2.5	1.5	0.9	0.993	0.793	0.854	0.480	サマ
57	実感	15		2.5	0.9	2.5	2.5	3.8	0.9	1.256	0.997	1.076	0.676	感情
58	質問	51	5.6	4.9	10.5	11.8	5.0	6.1	1.7	1.307	0.691	0.854	0.547	発話
59	指摘	34		1.2	1.8	5.9	7.5	5.3	6.9	1.538	1.312	1.383	0.754	思考
60	趣旨	58	5.6	4.9	12.3	12.7	7.5	6.8	1.7	1.404	0.667	0.854	0.559	思考
61	主張	36	4.5	8.6	7.0	4.2	5.0	1.5	3.5	1.191	0.860	0.959	0.506	発話
62	状況	20		1.2	4.4	2.5	5.0	3.0	0.9	2.175	0.757	1.076	0.648	サマ
63	条件	25	3.3	8.6	5.3	2.5	3.3	0.8	0.9	1.175	0.729	0.854	0.435	コト
64	状態	19	3.3	2.5	3.5	5.1	1.7	1.5		0.993	0.667	0.761	0.481	サマ
65	情報	33	6.7	6.2	5.3	4.2	5.0	2.3	1.7	0.888	0.806	0.833	0.485	発話
66	信念	10	2.2		0.9	4.2			1.7	0.725	1.103	0.959	0.548	感情
67	心配	23	1.1	3.7	8.8	1.7	4.2	0.8	0.9	2.082	0.651	0.959	0.507	感情
68	政策	11	3.3	1.2	2.6	0.8	1.7		0.9	0.888	0.838	0.854	0.430	思考
69	声明	10	1.1	3.7	2.6	0.8	0.8		0.9	1.256	0.838	0.959	0.430	発話
70	説	44	10.0	6.2	9.6	5.9	2.5	5.3	1.7	0.973	0.705	0.785	0.471	発話
71	説明	15	1.1	1.2	2.6	2.5	1.7	2.3	1.7	1.256	0.928	1.026	0.622	発話
72	前提	18		2.5	6.1	0.8	1.7	2.3	2.6	2.511	0.838	1.208	0.606	コト
73	側面	15		1.2		3.4	2.5	3.0	2.6	0.888	1.410	1.208	0.744	サマ
74	態度	54	10.0	14.8	13.1	8.4	1.7	3.0	1.7	1.123	0.656	0.785	0.416	サマ
75	立場	44	4.5	4.9	12.3	4.2	7.5	3.0	3.5	1.538	0.757	0.959	0.545	サマ
76	提案	11	4.5	2.5	1.8	0.8	1.7			0.688	0.757	0.733	0.331	思考
77	点	227	63.6	48.0	42.9	23.6	26.6	12.1	5.2	0.824	0.610	0.674	0.411	コト
78	問い	22	1.1	1.2	0.9	5.1	3.3	2.3	5.2	0.888	1.363	1.182	0.710	発話
79	努力	11	1.1	1.2	1.8	0.8	1.7	1.5	1.7	1.087	0.997	1.026	0.622	行為
80	ニュース	18		3.7	6.1	5.1		0.8	0.9	2.511	0.705	1.076	0.502	発話
81	認識	42		1.2	7.9	7.6	7.5	8.3	2.6	2.808	0.793	1.208	0.676	思考

No.	同格連体 名詞	通算 頻度	100万語当たりの調整頻度(PMW)								平均変化率			平均リ ジット	意味 分類
			50年	60年	70年	80年	91年	00年	10年	～70年	70年～	全期間			
82	願い	13	1.1		2.6	3.4		3.0	0.9	1.256	0.838	0.959	0.625	感情	
83	狙い	55	2.2	8.6	14.9	9.3	5.0	6.1	3.5	2.175	0.724	1.044	0.556	感情	
84	配慮	17			5.3	3.4	5.0	0.8		2.349	0.613	0.959	0.601	思考	
85	発言	18		2.5	1.8	3.4		6.1	1.7	1.538	0.997	1.152	0.693	発話	
86	発想	20			2.6		4.2	4.5	5.2	1.776	1.146	1.326	0.793	思考	
87	話	161	20.1	33.2	27.2	26.2	15.8	16.6	11.2	1.152	0.811	0.911	0.524	発話	
88	反省	13		3.7		3.4	2.5	1.5	0.9	0.888	1.185	1.076	0.614	思考	
89	判断	37	2.2	2.5	7.0	11.8	1.7	3.8	3.5	1.538	0.860	1.044	0.594	思考	
90	非難	12	1.1	11.1	0.9		0.8			0.888	0.838	0.854	0.272	発話	
91	批判	50		11.1	14.0	6.8	5.0	3.8	5.2	3.661	0.798	1.326	0.561	思考	
92	評価	13			2.6	2.5	3.3	1.5	0.9	1.776	0.838	1.076	0.669	思考	
93	表現	29		6.2	4.4	0.8	5.0	6.8	2.6	2.175	0.901	1.208	0.650	発話	
94	不安	28	1.1	7.4	5.3	2.5	2.5	3.0	4.3	1.661	0.959	1.152	0.578	感情	
95	風潮	12		2.5	1.8	1.7	0.8	3.0	0.9	1.538	0.901	1.076	0.635	サマ	
96	不満	24	1.1	1.2	2.6	8.4	4.2	3.0		1.256	0.705	0.854	0.613	感情	
97	雰囲気	15					2.5	6.1	3.5	0.888	1.490	1.254	0.861	サマ	
98	返事	18	1.1	3.7	6.1	2.5	1.7	0.8	0.9	1.776	0.705	0.959	0.488	発話	
99	方向	14	3.3	1.2	2.6	5.1		0.8		0.888	0.705	0.761	0.440	サマ	
100	報告	20	3.3	2.5	3.5	1.7	0.8	3.8	2.6	0.993	0.943	0.959	0.572	発話	
101	方針	41	8.9	4.9	9.6	5.9	4.2	3.0	1.7	1.025	0.705	0.799	0.471	思考	
102	報道	24	10.0	2.5	2.6	1.7	1.7	3.0	1.7	0.562	0.928	0.785	0.431	発話	
103	方法	20	5.6	2.5	6.1	0.8	0.8	2.3	0.9	1.025	0.705	0.799	0.430	コト	
104	保証	13	2.2		4.4	1.7	2.5	0.8		1.256	0.637	0.799	0.501	思考	
105	見方	151	17.8	14.8	47.3	25.3	16.6	9.1	6.0	1.597	0.616	0.846	0.505	思考	
106	見通し	17	4.5	4.9	2.6	1.7	1.7	1.5		0.794	0.705	0.733	0.402	思考	
107	矛盾	10		6.2	0.9	0.8	0.8	0.8	0.9	1.256	0.997	1.076	0.471	コト	
108	メッセージ	16					2.5	3.8	6.9	0.888	1.726	1.383	0.886	発話	
109	面	13	2.2	2.5	1.8	1.7		3.0	0.9	0.888	0.901	0.896	0.540	サマ	
110	目的	17	2.2	3.7	2.6	4.2		1.5	1.7	1.025	0.928	0.959	0.513	思考	
111	目標	11			2.6	0.8	0.8	1.5	3.5	1.776	1.054	1.254	0.741	思考	
112	問題	110	21.2	16.0	24.5	17.7	7.5	10.6	5.2	1.069	0.699	0.805	0.482	コト	
113	約束	23	2.2	4.9	6.1	1.7	2.5	2.3	1.7	1.450	0.780	0.959	0.517	感情	
114	やり方	15	4.5	4.9	2.6	0.8	1.7	0.8		0.794	0.705	0.733	0.358	行為	
115	夢	10	1.1	1.2	1.8	0.8	0.8	1.5	1.7	1.087	0.997	1.026	0.611	感情	
116	要求	10	4.5	2.5	2.6	0.8				0.794	0.705	0.733	0.258	思考	
117	要望	14		4.9	1.8	1.7	0.8	3.8		1.538	0.757	0.959	0.570	感情	
118	理屈	11		1.2	4.4	0.8			3.5	2.175	0.952	1.254	0.614	コト	
119	利点	13		1.2	3.5	1.7	0.8	3.8		1.985	0.667	0.959	0.626	コト	
120	理由	84	15.6	17.2	12.3	13.5	10.8	4.5	6.0	0.888	0.852	0.864	0.489	コト	
121	例	17	3.3	1.2	4.4	4.2		1.5	0.9	1.087	0.757	0.854	0.483	コト	

部[他]1985:133-135)を用いて求めた累積度数にもとづく増加傾向を、特定の群(または、すべての群の合計)の増加傾向を基準として評価・比較するという「リジット解析」の指標であり、したがって、各年の使用率ではなく使用頻度をそのまま用いて算出する(0をとるデータがあっても差し支えない)。今回のコーパスの場合は、時間的順序性のある1950年から2010年までの7調査年における各語の累積度数の増加傾向を、(コーパスのすべての語ではなく)同格連体名詞全体の各年総頻度の累積度数分布を基準とする平均リジット(0～1の値をとる)で表し、表2の「平均リジット」の列に示した。その値が0.5より大きければ増加傾向、小さければ減少傾向にあるとみる。なお、リジット解析の詳細については、渡部[他](1985)および石井(2016)を参照されたい。

最後に、「意味分類」の列には、前述した同格連体名詞の6分類(コト、サマ、思考、感情、発話、行為)を示した。

7. 同格連体名詞使用量の変化傾向

表2の各年PMWのデータをもとに、調査期間内(1950年～2010年)の同格連体名詞の使用量が全体および各類でどのように変化しているのか、その漸次的な傾向を探る。

まず、新聞の使用語彙全体(＝延べ語数)の中で、同格連体名詞の使用量がどのように変化しているかを見る。表3は、対象とした同格連体名詞各類の各年PMWの推移をまとめたものである。

表3：同格連体名詞各類のPMW

同格連体名詞	1950年	1960年	1970年	1980年	1991年	2000年	2010年
コト	182.9	184.5	182.2	130.8	78.9	87.8	47.5
サマ	53.5	67.7	70.9	70.0	40.7	46.9	24.2
思考	149.4	204.2	276.8	201.7	139.5	126.4	76.8
感情	62.4	100.9	120.9	113.1	78.9	114.3	102.7
発話	88.1	155.0	155.0	135.0	97.2	97.6	77.7
行為	13.4	22.1	18.4	17.7	19.9	14.4	6.0
計	549.8	734.4	824.2	668.4	455.2	487.3	334.8

図1は、表3の「計」の行、すなわち同格連体名詞全体のPMWの推移を折れ線グラフにしたものである。

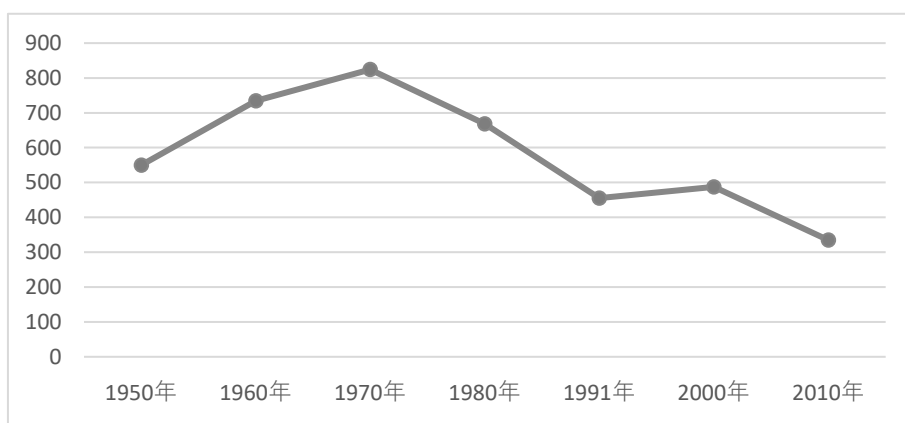


図1：同格連体名詞全体のPMW

図1を見ると、同格連体名詞全体の使用量（＝総使用率）は、1950年から70年にかけては増加、70年以降は（2000年に若干増えるものの）減少という、逆V字型の「劇的」な変化傾向を示していることがわかる。

また、図2は、表3の同格連体名詞各類のPMWの推移を折れ線グラフにしたものである。

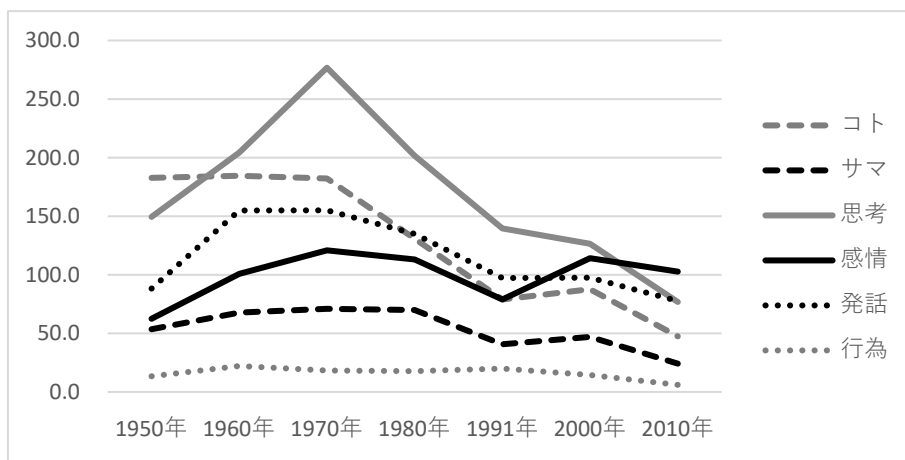


図2：同格連体名詞各類のPMW

1970年までの増加期でとくに顕著な増加を示しているのは思考名詞と感情名詞，すなわち奥津(1974)のいう主観的同格連体名詞である。発話名詞も1950年から60年にかけては大きく増えている。一方、客観的同格連体名詞であるコト名詞とサマ名詞は横ばいか微増で、それに準ずる行為名詞も横ばいである。

1970年以降の減少期ではすべての類が減っているが、感情名詞は1991年以降持ち直していて、70年以降全体として見れば横ばいと言ってよい。発話名詞も91年以降の減り方は小さい。

では、「という」に後続する同格連体名詞の使用における、こうした1970年(代)を境とする増加から減少への急激な転換は、どのような理由によって生じたと考えればよいだろうか。

一つの可能性として考えられるのは、新聞のいわゆる「紙面改革」の影響である。『朝日』『毎日』『読売』などの一般紙は、1970年代から写真や図表を多用する「紙面のビジュアル化」、80年代からは活字を大きくする「文字の拡大化」（『毎日』は82年末から）を進めてきた。その結果、新聞の1ページの文字数は2001年の『朝日』で70年代より4割近く減り（藤田2001:8）、一面記事の件数も1968年から98年にかけての30年間で『朝日』で28%、『毎日』で14%減っている（湯地2000:73）。こうした紙面改革による記事字数の大幅な減少に対して、一般紙は、『朝日』が2001年3月15日付の「社告」で「文字拡大により記事量は若干減りますが、簡潔に書き情報量を減らさないようにし、質の高い紙面づくりを目指します」と「宣言」したように、文章の簡略化ないし凝縮化によって対応したことがうかがえる。とすれば、同格連体名詞の使用においても、修飾節との間の「という」の介在が任意であれば（わずか3文字ではあるが）それを省略する（あえて挿入しない）ことが増えた可能性がある。

「という」の任意性は、寺村(1977)が「『トイウ』は、底の名詞に、その内容を（文の形で）あらわす修飾部の中の陳述度＝モダリティが高ければ高いほど必要であり」（寺村1977=1992:267）、「陳述の度合いという点からいうと、（略）発話→思考→コト→感覚、相対関係という順で、修飾節の陳述の度は減っていき、単なる叙述内容、propositionになっていく」（同前:296）とするように、陳述度の大きさと逆相関すると考えられるから、「という」が省略され、したがって「という」に後続する同格連体名詞の使用が減る可能性や度合いも、客観的同格連体名詞であるコト名詞・サマ名詞で最も大きく、次いで主観的同格連体名詞の中でも奥津が「理性的」とする思考名詞で大きく、奥津が「情緒的」とする感情名詞、さらに発話名詞では小さいと予想される。

そこで、改めて図2の1970年以降の傾向を見ると、正確に上の順序通りでは

ないが、確かにコト名詞・サマ名詞・思考名詞の減り方が大きく、それに比べれば感情名詞・発話名詞の減り方は小さい。1970年以降の「という」に後続する同格連体名詞の使用量は、「という」が任意であることの多いコト名詞・サマ名詞・思考名詞では「という」を省略することが多くなったために本稿でのカウントの対象から外れてより大きく減少し、「という」が必須であることの多い感情名詞・発話名詞では「という」を省略できないためにそれほどは減少しなかったということが推測されるのである。

この推測が正しければ、1970年以降の変化傾向には新聞文章の簡略化・凝縮化という外的作用が影響（干渉）している可能性があるため、表3のデータ（＝新聞の使用語彙全体に対する使用率）から「という」に後続する同格連体名詞の使用量の変化傾向を導くことは適当でないとわざるを得ない。そこで、そうした影響を多少とも緩和するために、以下では、（新聞の使用語彙全体の中ではなく）同格連体名詞の使用量全体の中で、各類の割合（＝構成比）がどのように変化しているかを見ることにする。

図3は各類の構成比を積み上げ棒グラフにしたものだが、各類の動き（推移）をよりわかりやすくするために（積み上げずに）折れ線グラフにしたものが図4である。図4を見ると、コト名詞はほぼ一貫して減少、サマ名詞は横ばいから微減、思考名詞は1970年まで増加した後に減少、感情名詞は一貫して増加、発話名詞はゆるやかに増加、行為名詞はほぼ横ばい、といった変化傾向が読み取れる。

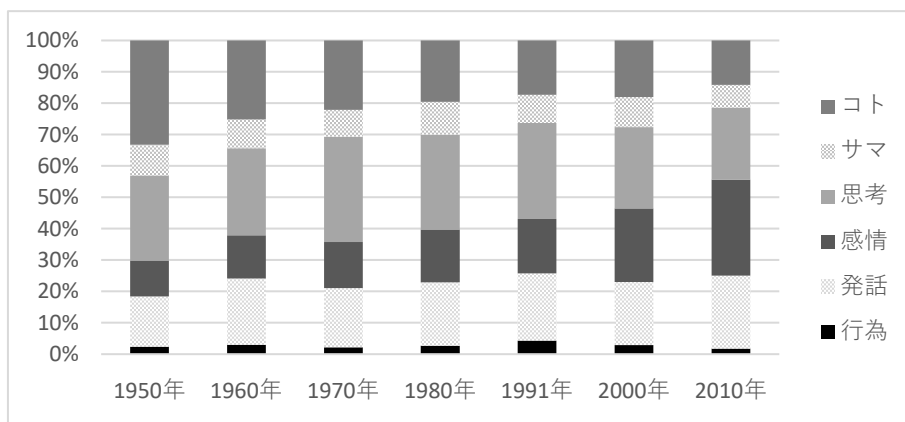


図3 同格連体名詞各類のPMW構成比（積み上げ棒グラフ）

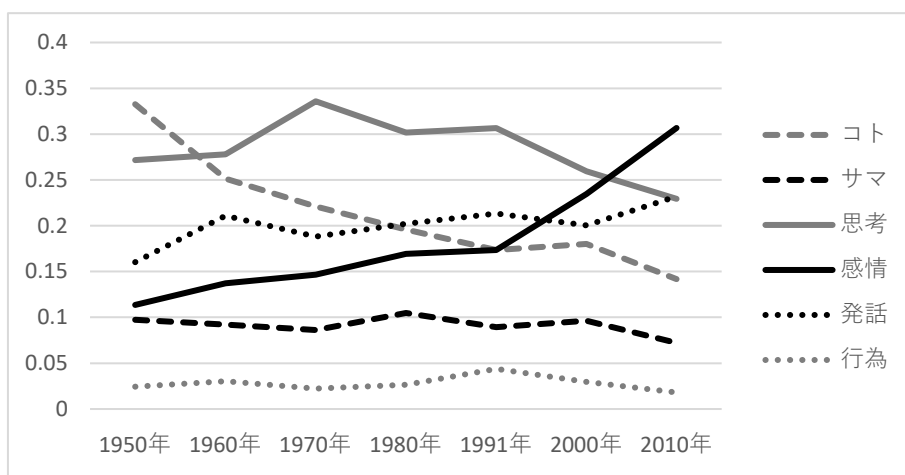


図4 同格連体名詞各類のPMW構成比（折れ線グラフ）

総じて、奥津のいう客観的同格連体名詞が減って主観的同格連体名詞が増え、主観的同格連体名詞の中では「理性的」が減って「情緒的」が増えるという、あるいはまた、寺村のいう（修飾節の）陳述度の小さな類が減って大きな類が増えるという相対的な変化傾向があると解釈することができる。また、最も大きな割合を占める類に注目すると、1950年はコト名詞、60年から2000年までは思考名詞、2010年は感情名詞となっていて、この「コト名詞→思考名詞→感情名詞」という順序も上の変化傾向に整合するものである。

次に、個別の同格連体名詞の、期間全体での増減傾向を見る。増減の指標には表2の平均リジットを用いる。表2の平均リジットは、6節でも述べたように、同格連体名詞全体の累積度数分布を基準として、それと各語の累積度数分布とを比較したものであり、図1のような増減のトレンドが大きく転換する逆V字型のような分布でも、平均変化率のように増加期の変化率と減少期の変化率とが相殺するようなことはなく、全期間の増減のトレンドをとらえやすい。

次ページの表4は、平均リジットを0.1の幅で階級区分し、それぞれに位置する同格連体名詞を意味分類別に示したものである。前述したように、平均リジットは0から1の間の値をとり、0.5より大きければ増加、小さければ減少であることを示す。また、表5は、表4の結果を増加傾向を示す語数と減少傾向を示す語数とにまとめ、さらに両者の比を意味分類別に示したものである。この（増加/減少の）比は、増加傾向の語数が減少傾向の語数の何倍あるかを示すも

のだが、「コト名詞<サマ名詞<思考名詞<行為名詞<発話名詞<感情名詞」の順に大きくなっており、これも上に見た相対的な変化傾向と概ね一致する。

表4：同格連体名詞各語の平均リジットによる増減傾向

同格連体名詞 平均リジット		コト	サマ	思考	感情	発話	行為
増加傾向	0.8超		雰囲気*		思い*	メッセージ*	
	0.7超0.8以下	ケース	イメージ* 側面*	発想* 指摘* 目標*	意識* 危機感* 思惑*	問い*	
	0.6超0.7以下	現実 利点 理屈 前提	状況 風潮	認識 姿勢 評価 反省* 観点 配慮	実感 期待 自覚 気持ち* 願い 不満 夢	発言 表現 説明	議論 努力 試み
	0.5超0.6以下	意味 規定 仕組み 結果	現状 事情 立場 面 印象	判断 計算 作戦 批判 趣旨 案 疑問 目的 意見 見方 考え 保証	不安 感じ 意欲 要望 狙い 信念* 約束 心配	言葉 声 報告 回答* 記事 答え 質問 話 うわさ 主張 ニュース	動き
減少傾向	0.4超0.5以下	事件 点 方法 条件 原則 矛盾 問題 例 理由	態度 傾向 方向 空気 事態 状態	見通し 政策 考え方 結論 方針 観測 構想	決意 懸念 意図 希望 自信	声明 報道 説 情報 返事	
	0.3超0.4以下	事実		提案 見解 計画	意向		運動 やり方
	0.2超0.3以下		有様	要求		非難	

表5：同格連体名詞各類の増減傾向（語数）

	コト	サマ	思考	感情	発話	行為
増加傾向	9	10	21	19	16	4
減少傾向	10	7	11	6	6	2
増加/減少	0.90	1.43	1.91	3.17	2.67	2.00

なお、表4で*を付した語は1970年以降の平均変化率が1.0超のもの、すなわち図1の減少期でも減らずに増えた語であるが、これも感情名詞・思考名詞・発話名詞に多く、コト名詞・サマ名詞に少ない。

以上のように、同格連体名詞各類の使用量の構成比を見る限り、主観的な意味合いが強く、修飾節の陳述度が高い名詞類の使用が相対的に増えているという変化傾向を見出すことができる。

8. 変化傾向の具体相

上述の変化傾向——主観性・陳述度のより大きな同格連体名詞の使用が相対的に増えている——は、5節でも述べたとおり、同格連体名詞を、(A)修飾節の内容や性質、(B)修飾節との関係などを考慮せずに、その(C)語彙の意味により「一語一類」の原則で分類して、それぞれの使用量をひとしなみにカウントし、各類に合算して導いたものである。要するにあくまでも大局的な「傾向」ととどまるものであるから、それが具体的にどのような「変化」であるのかを問う余地をなお大きく残している。それに答えるためには、個々の同格連体名詞の使用とその変化を詳しく追ひ、より具体的な変化の実相に迫っていく必要がある。今はそのすべてを今後の課題としなければならないが、ここでは、その端緒を探る試みとして、感情名詞の使用の相対的増加という変化がどのような機序の下に生じているのかを、感情名詞で最も増加傾向の大きかった「思い」を例に検討してみたい。

表4に見るように、「思い」は感情名詞で最も平均リジットの値が大きく、明確な増加傾向を示しているが、以下では、その類義語である感情名詞「気持ち」および思考名詞「考え」と比較しながら、その増加がどのように生じているのかを探ってみる(表4ではこの3語を太字で示した)。なお、「思い」と「考え」については、類義語辞典にも、

- (4) 「思い」は、想像、回想、感慨、希望、心配、恋情など、広く主観的、感情的な心の働きをいう。「考え」「思考」には、「考え方」「思考方法」のように、「思い」よりも、一つの筋道を追って判断するという客観性がある。(『使い方の分かる類語例解辞典』小学館、2003、p.210)

などとあり、前者を「情緒的」な感情名詞、後者を「理性的」な思考名詞とすることは妥当であろう。奥津(1974)は、「思い」はあげていないが、「考え」を「理性的」、「気持ち」を「一般的」の例にあげている。大島(1991)は、「思い」「気持ち」「考え」をいずれも心理名詞(関数タイプ)の例にあげ、「考え」は(修飾節に主語が入る)思考名詞の例にもあげている。

さて、次ページの図5～7は、この3語のPMWの推移を積み上げ棒グラフに描いたもので、棒の内部には3語がとった修飾節をその末尾の形式で分類した内訳を示している(「動・形・形動」は、動詞・形容詞・形容動詞が他の要素を付属させずに修飾節末の述語となったもの)。

まず、棒の高さの推移により、3語の使用量の漸次的な変化傾向を見ると、「考え」(図7)は、1950年には3語の中で最も多く使われ、80年まではほぼ横ばいで推移した後に減少に転じ、2000年から2010にかけては激減している(この減少には、前述した紙面改革が影響している可能性がある)。これに対して「思い」(図5)は、1970年まではあまり使われなかったが、80年から増え始め、2000年には大きく増えて、2010年には激増している。両者の使用量の推移はほぼ相補的で、「考え」から「思い」に交替しているようにも見える。一方、「気持ち」(図6)は、1950年から60年にかけて大きく増加して「考え」の使用量を抜くが、その後はほぼ横ばいで、「考え」や「思い」の増減に対応するような動きは見せていない。なお、3語とも1991年の使用量が前後の調査年に比べて過度に少なくなっているように見えるが、その理由はわからない。

次に、棒内部の内訳により、3語の修飾節末形式の使用量の推移を見ると、まず、「気持ち」が1950年から60年にかけて大きく増加する際に、修飾節末の述語形式が「～たい」であるもの(以下「～たい」節。他も同様)が(何らかの理由により)増えていることが注目される(図6)。一般に「話し手の《願望》を表す」とされる「～たい」節は、奥津(1974:342-343)が「欲」のような「人間の心理において、将来において何かを欲し、願い、望む作用(略)を表現する名詞」は「意志・願望の文末詞をとる文」を補足文(=修飾節:引用者注)としてとることができる」と指摘するように、情緒的=感情名詞がとりやすい修飾節である。逆に、奥津が「願望・欲求の意味を全く含まない(略)人間の心理の理性的側面を表わす同格連体名詞」(同前:346)の例にあげる「考え」

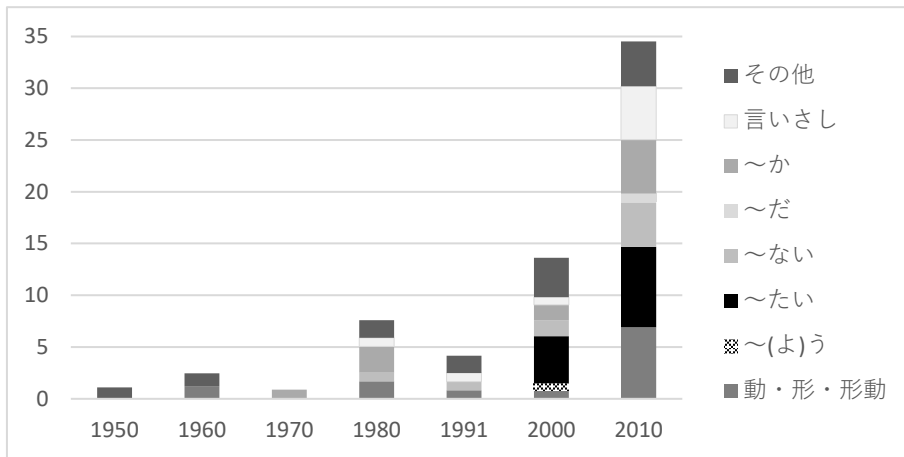


図5 同格連体名詞「思い」のPMWと節末形式

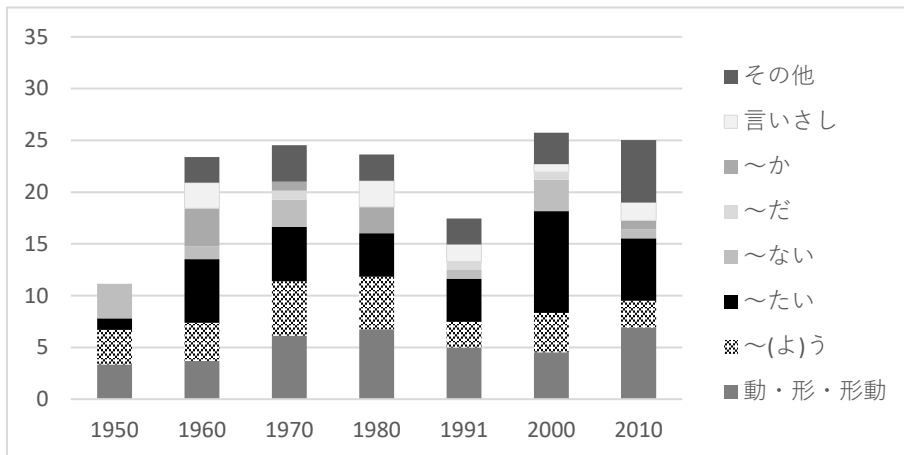


図6 同格連体名詞「気持ち」のPMWと節末形式

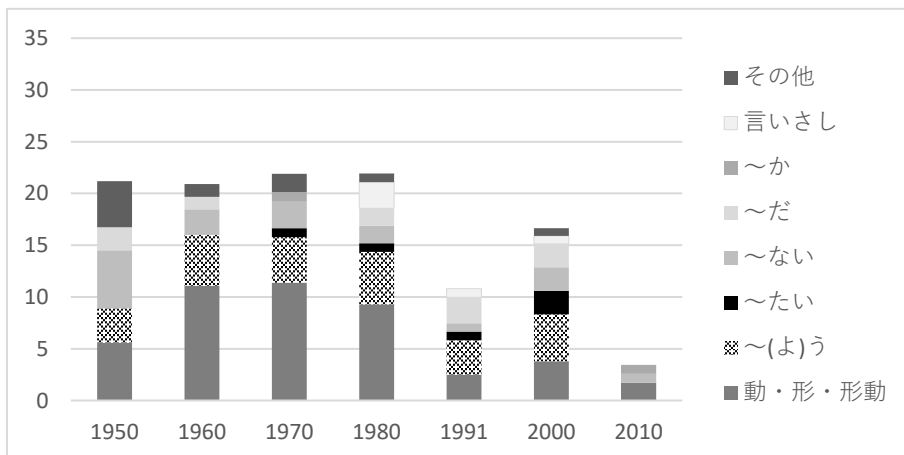


図7 同格連体名詞「考え」のPMWと節末形式

は「～たい」節をとりにくいはずである。1950年から60年にかけての「～たい」節の増加が、「気持ち」の増加はもたらしても、「考え」の増加に結び付かなかった(図7)のはこうした理由によると考えられる。

ただし、1960年の段階では、まだ「思い」はほとんど使われていない。「思い」が大きく増えるのは1991年から2000年にかけてだが、ここでも興味深いことに「～たい」節が増えている(図5)。そして、この時期には、「思い」だけでなく「気持ち」や「考え」でも「～たい」節が増えているのである。これは、新聞における「～たい」節の使用が(何らかの理由により)1960年の段階より大規模に増えたことを推測させる。そのため、結びつく同格連体名詞が既存の「気持ち」だけでは済まず、新たに「思い」という感情名詞を動員し(これには、日常語「気持ち」と文章語「思い」の文体的な違いも関係しているか)、さらには、本来は結びつきにくいはずの思考名詞「考え」までも使うという事態に至ったのではないか。

ただ、2010年になると、「～たい」節が増えているのは「思い」のみで、「気持ち」では減り、「考え」では使われなくなってしまう。これは、この段階での「～たい」節の増加が、結局のところ、「気持ち」や「考え」の増加ではなく、「思い」の増加をもたらしたことを示している。

以上に見た「～たい」節の増加による「気持ち」次いで「思い」の増加は、次のような機序による変化であるとまとめることができる。

- 【1】修飾節が人間の情緒的心理＝感情を内容とすることが増え、それに伴って、それらと結びつきやすい情緒的＝感情名詞の使用が増える

これは、以下に示すように、修飾節がより主観的で陳述度の高い内容を表すようになるとともに、客観的＝コト・サマ名詞より理性的＝思考名詞、さらには情緒的＝感情名詞の方がより結びつきやすくなるという、修飾節と同格連体名詞との関係性にもとづくものと考えられる。

- (5-1) 短期間で外国語を習得する(という)事実(例, 方法, …)
- (5-2) 短期間で外国語を習得しようという考え(計画, 方針, …)
- (5-3) 短期間で外国語を習得したいという思い(願い, 夢, …)

なお、(5-2)で例とした「～(よ)う」節は、一般に「話し手の《意志》を表す」とされ、《願望》の「～たい」節と同様、人間の情緒的心理を表すと考えられるが、図5・図7を見る限り、感情名詞の「思い」とは結びつきにくく、思考名詞の「考え」とは結びつきやすいようである。

次いで、「思い」が2000年から2010年にかけて激増する局面を見ると、「～たい」節以外の修飾節と結びつく例も増えている(図5)。その多くは感情名詞「思い」が無理なくとり得る修飾節であって、これらの使用の増加は上の【1】の延長線上にある変化と考えられる。

ただ、用例の中には、次のように、本来は「考え」とすべきところを「思い」で表現したような例も少なくない。

- (6) 監修したS教授は「生物多様性を守るには人間社会が変わらなければならないという思いが込められている」と話す。(2010年, 科学面)
- (7) 「たとえ華々しいことがなくても、人生の主役はあなたです、という思いを伝えたくて」、見開きにした分厚い本のさまざまなシーンを、油絵の具で、明るく透明感あふれる色彩で描いた。(2010年, 経済面)
- (8) 作者には「回想する人間はうそをつく、」という思いがあるんじゃないでしょうか。(2010年, 文化面)

(6)の「込める」のような後続述語との関係は度外視し、今は修飾節との結びつきにのみ注目するなら、(6)～(8)の同格連体名詞は「考え」であっても問題なく、むしろ、大島(1991=2010:223)が思考名詞「考え」がもつとした「修飾節に主語が入る用法」であることを考えれば、「思い」より「考え」の方が本来的であると言える。

また、次の(9)と(10)とを比べると、かつては「考え」で受けていたのと同様の修飾節を、2010年時点では「思い」で受けるようになったとも推測できる。

- (9) 菊池さんのこうしたいい方でいおうとしている底に流れていたものは、文学を大衆のものとしなければならぬという考えであつたろうと思う。
(1960年, 学芸面)

- (10) 記者会見で石破茂政調会長は「民主党政権を打倒しなければならな

いという思いは一致している」と理解を示し(略) (2010年, 社説)

以上のような例は、「思い」が「考え」と同じ思考名詞になったというより、思考を表す修飾節の内容を感情ととらえて、より正確に言うと、単なる思考だけでなく、そこに主体(持ち主)の感情的側面も付加されていることを表現したくて、「思い」で受けるようになったのではないかと考えられる。

このような形での「思い」の使用の増加は、次のような機序による変化であるとまとめることができる。

【2】それまで人間の理性的心理＝思考ととらえていた修飾節の内容を、情緒的心理＝感情(も付与されたもの)ととらえることが増え、それに伴って、それらと結びつきやすい情緒的＝感情名詞の使用が増える

これは、以下に示すように、同じ修飾節の内容を、客観的な事柄・状態(11-1)とも、理性的心理＝思考(11-2)とも、情緒的心理＝感情(11-3)ともとらえることが可能であるという、修飾節と同格連体名詞との関係性にもとづくものと考えられる。

(11-1) 短期間で外国語を習得する(という) 事実(例, 方法, …)

(11-2) 短期間で外国語を習得する(という) 考え(計画, 方針, …)

(11-3) 短期間で外国語を習得する(という) 思い(願い, 夢, …)

9. おわりに

以上、本稿では、20世紀半ば以降の新聞における(「という」に後続する)同格連体名詞の使用について、主観性・陳述度のより大きな名詞類の使用量が相対的に増えているという変化傾向を見出し、その機序の一端として上述の【1】および【2】を仮説的に提示した。2節でも述べたように、同格連体名詞として働く名詞類は、文章中で指示語句など様々な形式の叙述構成語としても働いていると考えられるから、この結果は、現代新聞の叙述構成の中核を担う語類が主観的な意味合いの強いものに変化している可能性を示唆するものであり、さらには、新聞の「前の部分をまとめて後ろにつなぐ」という叙述構成において、人間の主観的(情緒的)心理がその内容＝意味分節となることが増えているの

ではないかということ推測させるものでもある。

樺島忠夫は1963年の著作で、「表現対象を言葉にうつす」際の「叙述の態度」5種の一つである「指示的」対「感覚・評価的」について、次のように述べる。

(12) 表現対象のあり方、質やその部分間の関係などを客観的、論理的あるいは実証できる形式で叙述するのが指示的叙述である。これに対して対象を送り手が感覚的にとらえ表現したり、また対象に対する送り手の主観的な価値評価や好ききらいを述べるのが、感覚・評価的叙述である。したがって指示的叙述は表現対象と受け手とを直接に結びつける叙述となるが、感覚・評価的叙述は表現対象のあり方を送り手というフィルターを通して受け手に伝える叙述となる。(改行)新聞は指示的叙述であるが、同じく新聞の文章でも見出しは読者の興味を引く必要があり、また社会的指導性あるいは正義をもちこもうとする時に感覚・評価的になる場合がある。(樺島 1963:35-36)

人間の主観的（情緒的）心理を意味分節化して叙述の中心に据えることと、樺島のいう指示的叙述とは同一ではないが、これまでは客観的な事柄や状態を表現することの多かった新聞文章が、人間の主観的（情緒的）心理を表現することの多い文章へと変化しているとすれば、それは指示的叙述から感覚・評価的叙述への変化につながっていくだろう。1963年時点で樺島が指摘する「新聞の文章が感覚・評価的になる場合」は、その後（2010年までの）ほぼ50年を経て次第に拡大してきている可能性があるのではないだろうか。もちろん、このことは、「という」を介在させない同格連体名詞の使用をも対象とする包括的な調査によって確認していかなければならない。

引用文献

- 石井正彦(2016)「リジット解析ー計数データを用いた言語研究への適用ー」『計量国語学』30-6, pp. 357-377, 計量国語学会
- 石井正彦(2022)「現代新聞語彙における“基本語化”と“非基本語化”ー使用率・均等度の平均変化率を用いた量的検討ー」『阪大日本語研究』34, pp. 1-25, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 大島資生(1991)「名詞の統語的・意味的分類の試みーいわゆる「同格連体名詞」

- について」『計量国語学』18-1, pp. 9-25, 計量国語学会 (大島資生『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房, 2010, 所収)
- 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論 名詞句の構造』大修館書店
- 樺島忠夫(1963)『表現論 ことばと言語行動』綜芸舎
- 樺島忠夫(2004)『日本語探検——過去から未来へ』(角川書店)
- 金 愛蘭(2022)「現代「語彙史」研究のためのコーパスと統計ー『毎日新聞経年コーパス』による語の増減傾向の分析ー」『計量国語学』33-4, pp. 233-248, 計量国語学会
- 高崎みどり(2021)『テキスト語彙論 テキストの中でみることばのふるまいの実際』ひつじ書房
- 高橋太郎(1979)「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」言語学研究会編『言語の研究』, pp. 75-172, むぎ書房
- 寺村秀夫(1977)「連体修飾のシンタクスと意味(3)」『日本語・日本文化』6, pp. 1-35, 大阪外国語大学研究留学生別科(寺村秀夫『寺村秀夫論文集 Iー日本語文法編ー』くろしお出版, 1992, 所収)
- 藤田博司(2001)「(メディア談話室)拡大文字と紙面改革」『新聞通信調査会報』462, pp. 8-9, 新聞通信調査会
- 水谷静夫(1964)「語の基本度」『国立国語研究所報告 25 現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊 分析』, pp. 7-51, 秀英出版
- 村木新次郎(2007)「日本語の節の類型」『同志社女子大学学術研究年報』58, pp. 9-17, 同志社女子大学学術研究推進センター (村木新次郎『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房, 2012, 所収)
- 湯地英里(2000)「第一面 30 年の変化を分析するー朝日, 毎日, 読売 3 紙を例にして」『新聞研究』589, pp. 71-74, 日本新聞協会
- 渡部洋・鈴木規夫・山田文康・大塚雄作(1985)『探索的データ解析入門ーデータの構造を探るー』朝倉書店

付記 本稿は, JSPS 科研費 JP22K00594 の助成を受けたものである。

(本学名誉教授)